

---

# 神々の血族

星海茅影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神々の血族

### 【コード】

N0450D

### 【作者名】

星海茅影

### 【あらすじ】

永久の昔話が・・・今、動き出した。

## く全ての始まりく

### プロローグ

今もあるのか。それとも、遠い昔に滅びてしまったのか。定かではない世界。

その世界は、初め…二つであったと言う。

一つは、定着した大地の元に、様々な種の生き物達と、植物達が、住み着いている世界。

空があり、海があり、大地があり、鳥が飛び、魚が泳ぎ、獣が野山を奔りまわる。

そして、その世界の住人の中で、最も力を持っていたのは、“人間” だった。

人は…獣のように、走り続ける事もできず、鳥のように、大空を舞うこともできず、魚のように、水中を自由に泳ぎ進む事もできないけれど、人はその二本の腕から、文明を築き上げ、その小さな頭で、様々なモノを造り続けた。

こうして、一つの世界は、完成したと言う。

\*

残された…もう一つの世界は、まったく別の変化を遂げた。

その世界は、空間をただよう不安定な地の元に、人間のような…獣のような生き物が、生まれた。

彼らは、時に不思議な獣の姿をし、時に人間の姿をしていたと言う。彼らには、人にも、獣にも、鳥や魚達にもない力が、あった。其の力で、彼らは世界を自分達の望む姿に変え、永遠に近い命を手にした。

後世に生まれた者達は、彼らのことを“神”と呼んだ。こうして、

神々の治めるもう一つの世界が、完成した。

《静寂

の予言書》二章「完成」

\*

二つの世界は、ゆっくりと変化していった。様々なモノが造られ、そして…壊されていったと言う。

それから、長い長い時間が経った頃。

ふと、独りの神が、人間の住まう世界へ、降り立った。

それに続いて、多くの神々が、人間の世界へと、降りて行った。

一つの世界を支配したはずの神々が何故…、その世界に飽きたのか。それとも、ただ興味を持っただけだったのかは、定かではない。

突然現れた神々に、初めは戸惑っていた人間達も、すぐに理解し合う。神々は、自らの力を封じ、人と共に歩む事になったと言う。

二つの世界の者達…其の血が混じり合い、新たなる者達が生まれた。彼らは、神と人の混血児。

こうして、世界は新たなる変化を遂げようとしている。

《静寂

の予言書》十章「変革」

く全ての始まりく（後書き）

一応、プロローグ完。さて、どうなりますやら。

覚醒く水晶の導きく1 (前書き)

幕開けを飾るのは、ある少女。

## 覚醒く水晶の導きく1

神と人の血が混じり、それから月日が幾重にも過ぎ去っても、世界全体では、たいして変化はない。

ただ、人間よりも力を持った者。神と人の混血児《神人》が、世界を支配したという事以外は…。

神人は、神の力と人よりも長い命を手にした人間達のこと。彼らはその力で、他の多くの人々を支配していった。

神の力は、もはや…神人達の支配の道具と化していたのだった。

\*

さて、そんな世の中でも、人間は生き続けている。深々とした森の淵、その小さな村の住民達も、生きることには必死だった。

ザツ…ザツ…。

草を掻き分けて、森の中を進む人影。トゲのある草木に気を配り、森の奥へと進んでいるのは、また成人にも満たない少女。

ようやく、十五歳くらい。肩口で切りそろえられた、まるで炎のような赤い髪。スラリとした手足をせわしなく動かして、行く手を阻む草やつるを払いのける。

その可愛らしい顔は、今見るからに不機嫌。それもそのはず…少女は村の為に、森の奥地にあるという洞窟の水晶を取りに、たった一人で、行かなければならないからだ。

しかも、その洞窟は、お決まりの一度入った者は、出ること叶わずと言いついわく付き。少女の身で、森の茨を抜ける度に、肌が痛み、不快感が募る。

「どうして、あたしが…」

少女が愚痴をこぼしたくもなるだろう。森の奥の洞窟へは、まだ遠い。それでも、仕方なさそうに歩き続ける。

「ヤナギ……」

ふと、どこからか声が聞こえる。

「えっ？」

少女は、自分の名を呼ばれ、立ち止まり、辺りを見渡す。

「ヤナギ……」

またしても、彼女を呼ぶ声。男か女すら良く分からない中性的な声だ。

ヤナギは声のする方：前方へゆっくりと歩き出す。

木々の間を抜けたヤナギの前に、現れたのは草むらに立つ不思議な感じのする女性。後ろ姿なので、顔が見えない。

長い黒髪を無造作におろし、純白の服を着た細身の女。

「あなたは誰？どうして、あたしの名前を知っているの？」

問いかけつつ、ヤナギはゆっくり、彼女に歩み寄っていく。

## 覚醒〜水晶の導き〜1（後書き）

ゆっくりと、書き進めます。先は長いですけど。

覚醒く水晶の導きく2 (前書き)

少女の進む道は、まだ始まりの渦中。

## 覚醒く水晶の導きく2

この女性は、この森の深部に、まったくの無防備な状態で迷い込んだみたいだ。森には、危険がたくさんある。

ヤナギも護身用の短剣を腰に吊るし、普段着とは違う革の防護服姿で、来ているのだ。

「ヤナギ……ついておいで」

ふいにそう言うと、女はまるで地面を滑るように歩き出す。

「待って!!」

叫ぶと同時に彼女を追う。

女は森の中を走り抜けていく。草を払う暇すらなく、ヤナギもひたすら走った。

彼女の白い服のおかげで、どうにか見失いそうになっても、ついていくことができた。

その瞬間、突然…ヤナギの視界から、女の姿が消えた。

「嘘!? えっ…ちょっと何処行ったのよ!!」

慌てて、消えたほうへ駆けて行く。草むらを飛び越えて、ヤナギがたどり着いたのは、例の洞窟だった。

辺りにあの女性の姿はない。

「一体どういうことなの??」

心底そう思うので、言葉にしながら、ヤナギは洞窟へ歩み寄る。

ピッチャン…ピッチャン…奥から、水滴のしたたり落ちる音が聞こえてきた。

ゾクリと嫌な寒気を感じつつ、ヤナギはそれを無視し、薄暗い洞窟へ入っていく。

所々に水溜まりがあり、洞窟全体は、ムツとした湿気に包まれている。

「気持ち悪い所だわ。早く帰ろう」

思わず呟くヤナギ。

滑らないように気をつけて、奥へと進む。進めば進むほど、入り口からの光は薄れて、暗さが増していく。

洞窟の壁づたいに、更に奥へ行くと……ふいに、光が見えてきた。洞窟の奥で、何かが光っている。

普通なら引き返す所だが、まだ水晶を見つけてないし、その光への好奇心に負けて、ヤナギはそのまま進む。

光はどんどん強さを増し、細かった洞窟が急にひらけた。洞窟の最奥部へ来たのだ。

「わあ」

目の前に広がるその景色に、ヤナギは感嘆の声をあげる。

黒い洞窟石の所々に、水晶が顔を出し、淡い光を放っている。しかし、ヤナギの目は上を見上げたまま動かない。

その空間の中央には、まるで大樹のような巨大な水晶の柱が、そびえ立っていたから。

無意識のうちに、ヤナギは歩み出す。その目はまだ水晶の柱を見つめている。

そして、彼女は見つけてしまった。

水晶の柱の中に、人が閉じ込められているのを……。

覚醒く水晶の導きく2 (後書き)

気の赴く時のみ、急に書き出しますので・・・すみません。

覚醒く水晶の導きく3 (前書き)

ヤナギが見つけてしまったのは・・・

### 覚醒く水晶の導きく3

少年…いや、青年と呼んでもいい年頃の白服の若者。その長い銀色の髪は、女のヤナギから見ても美しい限り。

少し童顔だが、端正な顔立ち。水晶の中で映える雪のような白い肌。ヤナギの茶褐色の瞳に映る光景は、神秘的としか言いようがない。

「綺麗…」

ふとつぶやいて、彼女は水晶の柱にそつと触れた。

ピキッ

ヤナギの手が触れた所から、突然…蜘蛛の巣状にヒビが走る。さつと手を引つ込めた時には、ヒビは柱全体に広がっていた。

パリンッ！！

濁いた高音を立てて、水晶の柱が崩れる。

「キヤーッ」

咄嗟に短い悲鳴を上げて、ヤナギは逃げた。降り注ぐ水晶の破片と共に、彼を外へと解放される。

地に倒れ伏した彼は、次の瞬間ゆっくりと目を覚ます。開かれた瞳は、まるで紫水晶のような紫。

数回瞬きをしつつ、彼は起き上がり服についた泥を払う。

「あ…あなたは??？」

離れた場所から様子を見ていたヤナギが、恐る恐る聞く。

彼は初めてヤナギの存在に気づいたのか、彼女を見て……

「俺のことか？」

真顔で聞き返した。

「あんた以外に、いないでしょうが!!!」

ヤナギは呆れて叫ぶ。言われてから、辺りを見回し、再びヤナギを見ると、

「俺の名はキリト。神の血族だ」

きつぱり言い切った。それも神とはつきり言い放った。

「あんだ、馬鹿？神がこの地に降りて来て、もう一万年以上経ってるよ。あんだが本物の神様でも、生きてるはずないんだから」  
こいつは頭でも打っておかしいのかもしれない。とは言い切れないものの、不信を露わに言い返していた。

「まあ…確かにそれだけ経てば、普通に降りて生きてきた神は、軽く寿命は尽きてるな。だが、あいにくと俺は、降りて即行封印されちまったせいで、その時から時間も命も、一秒も動いてないわけ」  
目の前の少女が人間であることを知り、キリトは自らのことを説明し始める。

「つまり、俺は時間に取り残された……今、生きている唯一の神ってことになっちまってるんだろうな。あゝそれと、俺の名はキリトで、あんだじゃない。で、君は？？」

覚醒く水晶の導きく3(後書き)

のんびりすぎる執筆・・・すみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0450d/>

---

神々の血族

2010年10月9日11時11分発行